

第二回「大文賞」選考結果について

平成26年8月9日

第二回「大文賞」選考委員会

委員長

三井所清典 芝浦工業大学名誉教授、公益社団法人日本建築士会連合会会長

委員

岩瀬 繁 岩瀬建築有限会社代表取締役社長

後藤 治 工学院大学教授

島崎英雄 大工棟梁、職藝学院オーバーマイスター

山岡義典 市民社会創造ファンド運営委員長、日本NPOセンター顧問

山本博一 東京大学大学院教授

稲葉 實 学校法人富山国際職藝学園理事長

総評

「大文賞」は田中文男棟梁の遺志を受け、若手大工を育成する目的で創設されたものである。今回は第二回目で、その趣旨にかなった結果になったものと考えている。

選考は、7月11日に行われた。団体部門は提出された調書をもとに、応募された職業訓練校での大工育成のあり方及び田中棟梁考案の継手仕口モデルの活用法について検討を行い、選考委員の話合いによって決定した。

個人部門は事前に書類選考を行い、最終選考の面接出席者を2名に絞り込んだ。書類選考では、募集要項に示された要件を満足しているかどうか、大工職能に対する考え方がしっかりしているかどうか、を基準とした。選考委員会では、応募書類に記載された実績だけでなく、面接と実技考査を行い、「大文賞」にふさわしい人材の選考に取組んだ。面接は共通の質問と簡易な実技考査の2本立てで行った。また実技考査によって、継手・仕口についての知識や段取り能力などを審査した。

第一回では特別賞をブータンのクレイ・ウォンチュク氏に贈呈したが、今回は特別賞を設けるかどうか検討し、今回も設けることとなった。田中棟梁のもとでは、多数の外国の方が研修されたが、その中から選出することにした。候補者の名前が何人か上げられたが、今回は、ベトナムのグエン・トゥオン・キー氏に贈呈することになった。

A. 団体部門

「大文賞」大工育成団体奨励賞……長野県松本技術専門校

今回の応募は1団体のみであった。応募者は長野県が設置運営する職業能力開発施設で、2年制の訓練科（普通課程）として建築科などが設置されている。建築科では、木造住宅の在来工法における施工技術を基礎から学び、建築大工として必要な基礎的知識、技能を養うことができる。また、技能五輪競技大会への参加を通じ、技能習得に力を入れている。

継手・仕口模型は、工作実習だけでなく、規矩術や構造概論、工作法など基礎から専門的なものまで多くの学科で活用することを考えている。模型を活用することで、木造住宅に使用される継手や仕口についての理解をより深めることができる。以上のような活用を考えている。

この団体が実施していることは素晴らしいのだが、「大文賞」の趣旨には若干かなっていない面もあるように思われた。田中棟梁とまで行かなくとも、若手大工育成には、指導者の多大なる熱い思いが必要であり、それが若者たちの心に響くものである。それが伝統的な技術・技能を伝えていく力にもなりうるのである。そういう意味では、残念ながら、今回は優秀賞には該当しないという結論となった。松本技術専門校におかれては、これを機に若手大工育成に向けてさらなる努力と熱意をもって取り組んでいただきたい。

B. 個人部門

「大文賞」大工奨励賞……石飛 司君、山下 裕君

応募要項にも記載してあるように、事前に書類選考を行った。書類選考に当り、募集要項に示された要件を満足しているかどうか、大工職能に対する考え方が応募書類に記載できているか、を基準とした。最終選考の面接出席者は2名となった。大工職能についての考えで、対社会という視点からの見方がうかがえず物足りなさを感じるとの指摘もなされた。

最終選考では2人を個別に面接し、簡単な実技考査を行い、質疑応答を行った。時間配分については、実技考査に20分、質疑応答に20分程度とした。実技考査では、継手仕口模型の組立を行い、その様子を見ることとした。質疑応答では、共通の質問を4～5問行っただけで、各委員からの質問をするという形式にした。また質疑とは別に、それぞれが持参した日頃使用している道具（かんな）を選考委員で確認した。

その結果を受けて、最終選考を行った。これまでの経験や保有する技術・技能、将来性、

仕事に取り組む意欲、道具の扱い、継手仕口模型組立てにおける手順などのチェック項目をもとに2人の評価を行った。

◎個別の評価

- ・石飛君……実技考査では、継手や仕口をひとつずつ確認しながら、また独り言をつぶやきながら継手仕口模型を組立てた。それぞれの継手仕口の名称などをつぶやいていたとのことであった。部材を整理することはなく、見本模型と見比べ、必要な部材をさがしながら組立てていた。伝統構法でよく使われる長ホゾの経験はあまりないようだった。時間が短いこともあって、見本模型の全体をよく観察するという余裕がなかったのではないかと思われる。

質疑応答では、質問に対する答えは的確なものであった。特に共通の質問のうち、トラブル対応に対する質疑応答では、非常に評価が高かった。日頃から手刻みの物件を中心にこなしていて、プレカット工法ではできない加工には特段に思い入れが強そうである。手間を掛けることをいとわず、また、そのような技術を後世に伝えていきたいとの意気込みが感じられた。

大工としての実績は14年で、若手大工としては十分である。近い将来、棟梁にふさわしい人材に成長するだろうという期待は持てるが、さらなる精進が求められるというところで、奨励賞とした。

- ・山下君……実技考査では、まず最初に土台や柱という部材の整理を始めた。一つ一つの継手や仕口をよく観察しながら、組立てていこうという姿勢がうかがわれた。しかし、土台が組み上がるといきなり柱を立て始めた。長ホゾのある伝統構法の仕事の経験の少なさがうかがわれた。

カンナは大工になってすぐに購入したもので、10年間使い込まれ、よく手入れがされているようであった。

経歴書では、高校卒業後大工に就業するまで数年間のブランクがあったが、この間は職藝学院で勉強していたとのことで、一同納得したところである。共通の質問に対する答えは、石飛君に比べ少しもの足りなさがあったが、一応及第点のできであった。他の質問に対する受け答えでは自分の考え方や方向性がしっかりしており、職藝学院で受けた島崎棟梁の教育の成果がうかがわれた。日頃は、工期や予算に応じて、手刻みとプレカットを使い分けている。プレカットではできない部分が小屋組によくあり、プレカット業者から加工の依頼を受けることもあるようだ。大工が社会で果たすべき役割については、「顧客にしっかり説明し、長持ちのできる住まいを造っていくこと」

と答え、大工職としての誇りと自信が垣間見えた。しかし、まだまだ精進してもらいたい点もあり、奨励賞とした。

C. 特別賞

「大文賞」特別賞……グエン・トゥオン・ヒー氏（ベトナム社会主義共和国）

氏がベトナム国クアンナム省文化財局勤務中、1995年5月から11月まで文化財の保存修復等の研修のため来日した。当初の3ヶ月は奈良国立文化財研修所で考古学的発掘の研修を受けた。残りの4ヶ月は、田中文男棟梁のもとで文化財建築物修復の研修を受けた。当時“真木”で施工していた千葉県大多喜町の六所神社本殿修理工事や茨城県牛久市の観音寺仁王門修理工事などの実際の現場で修復技術についての研修を受けた。帰国してからは、引き続き文化財局に籍を置きながら、ベトナム各地の建築遺跡の修復や調査に活躍した。文化財局引退後も嘱託職員として、各地で活動している。

もともと建築技術者ではなかったが、日本での研修、特に田中棟梁のもとで研修を受けたことで、文化財建築物の調査や修復の技術者として活躍されていることを評価し、特別賞を贈呈することとした。